

「大津絵」紹介 仏で出版

日仏会館フランス事務所のクリストフ・マルケさん(50)Ⅱ写真Ⅱがフランス語で「大津絵〜日本の民画」という本を執筆し、フランスで出版された。日本語、英語版の出版企画も進行中だ。

大津絵は江戸時代初期、大津市付近で誕生し、東海道を行き来する人々に土産物として好まれた。「当時は『江戸の錦絵、京都の大津絵』として全国的に知られていました」とマルケさん。最初は仏画だったが、江戸中期から風刺的、道徳的な絵になり、後期は道中のお守りにも



なった。明治末期、京都と大津の間に鉄道が敷かれると廃れ、忘れられた。

マルケさんは東大に留学していた25年前、コレクターの所蔵する大津絵100種類を篆刻家の楠瀬日年(1888〜1960年)が模写して版面に起こした作品を目にし「日本美術で知られていない分野。江戸の庶民文化を理解する手がかり」と関心を持った。本には78点の絵と解説を載せた。「大津絵は名もない職人が作ったものですが、日本人のユーモアがよく分かります」